

古代日本の魂信仰 目次

神々と民俗 6

剣と玉 44

鳥の声 59

古代日本人の信仰生活 72

産霊むすびの信仰 85

上代葬儀じょうだんいの精神 94

万葉集に現れた古代信仰

編集後記

折口信夫セレクション1

古代日本の魂信仰

神々と民俗

あなたの方の中には、専門家でない方が相当にいらつしやるのです。したがって、神道に関係の深い方々に聞いてもらおうような、専門がかつた話ではございません。けれども、なにしろ神々の伊勢の国ですから、自然神様に関する多少専門がかつた話も、他府県の人々よりは、聞かなければならないという因縁めいた義務も、あるはずだし、よその人々よりも理解が深いに違いないと思います。私は大変話が下手なのですが、それは後の柳田先生が、非常に筋の通つた話をして下さいますから、それで埋め合せていただきます。

この世の中にあることが、昔から今のままにあって来たものというふうに信じているのは、少し考えの足らぬことです。変わらぬようにと努力し、少なくとも変わらなずに来ているものと信じてきたことは事実で、そのため、変化があつても、古代のままだと信じていることができたのです。それだけまた変化が少ない限度でとまるわけで、世間普通の考えで、古代のままという

のは、その程度のことを意味していることになるのです。しかし物の生命は必ず推移変遷して
いるはずのもので、変わっているのがあたりまえだと思わなければなりません。そうい
うことを土台として、たとえば、儀礼と芸能に渉る神楽など言うものが、伊勢の国柄と相叶う
て非常に発達し、微妙な発達を遂げたというふうに見える、事実ある点確かにそうで
もありません。

私達は芸能史というものを考えております。何も特にことごとく学問とする程の事もない
わけですが、考えたり、人に話したりしているうちに、自然組織めいたことが出来てきて、やや
学問らしい形をとることになって来たのです。そういうふうには、芸能史を考えている中に、漠
然とながらわかって来たことは、地方に出ている伊勢神楽というものには、存外お伊勢様——
大神宮自体には関係の少ないものが多いということです。神楽は伊勢から外の国々へ出て行っ
たものの中、とりわけ伊勢の国の北の境の田舎から出たものが多い。こういうことは、本を見
ても考えられるし、事実もそうらしいございます。しかしその神楽が長い年月、恒例として毎
年出て行っている間に、自然変遷をしてくれています。そのため一つのものでないという印象が
与えられるのです。たとえば宮廷の「御神楽」というものは、平安時代の中頃から盛んになり
ましたが、元よりそれ以前からも、神楽系統の儀礼あるいは芸能はあって、そこに来て、近世
我々の使うかぐらという語が特に用いられることになったというだけのことです。だから神楽

系統の儀礼芸能は、そこにはじまったわけではないのです。神楽というものが、そうして宮廷に榮えて、以前からある他の「神遊」^{カミアソビ}の中最も有力なものとなりました。

かぐらの名がここから強く行われ、それ以前からあつて、当時同時代に存在したのも、すべてこのかぐらという名称で統一せられることになったのです。だから、いわゆる神楽の歴史は広く、久しいものになります。決して宮廷神楽の研究だけで、かぐら全体がわかるわけではありません。伊勢神楽も、宮廷神楽以外の大きな動きの一つとして見ていくべきものでしょう。さてその伊勢の国から諸国へ出たと言われている神楽だけでも、種類が相当にあります。恐らく我々の知らぬ形で、伊勢神楽の流伝したのもあつたのでしょう。ひと頃は初春にさえなると、三河の奥、北設楽^{キタシタカ}地方へ神楽見学に参つたものです。この地方の神楽というのが大変なもので、今は前日の夕方から、翌日の昼前まで、ぶつ通しで幾番もの舞に、祈禱^{きとう}をはさんで行います。昔は七日七夜にわたつてしたもので、それは別に御神楽^{ミカガ}と言いました。これは伝説だけではないようです。近代では三日三夜ということになっていたといえます。これは、知っている老人が近年までもまだおりました。さらにこれを約めて、一夜ですることになった。それは花祭り^{ハナマツリ}と言っています。今は時間が自ら延びてきましたが、以前は朝の光がさすと同時に、神楽がすんだものです。この一夜の神楽を、花祭りと言うのには、理由がありそうです。この「御神楽」ないし現在の花祭りは、その伝来から見ると、伊勢の神楽と明らかに連関しているの

す。また伊勢から来た「みるめの王子」「きるめの王子」というような名の人があつたと言われ、その祀まつられていた場所もあります。(注1)

この花祭りという神樂行事は、今言つた北設楽郡一円にわたつてありまして、村の中には、花祭りの芸能を専もっぱら行う「字」があり、それに伴ういろいろな行事を処理するのが、他の字々の務めとなつてゐる。右の字々の人が、主として神樂の効果を蒙こうむるといふ形になつております。今の村の区画ではなく、その以前の字々をひつくるめて言つていた村が、その神樂を行い、あゝるいはその御蔭おかげをうける団体ということになるので、そういう字々に、花祭りの禰宜ねぎ・めうど(注2)といふものがあつたわけです。

いつの代に、この広い地域の山間へ入つて来たかわからない。が、伊勢神樂の一派に深く通じるものを持つてゐることは、我々がしばしば觀察した結果、知りました。言わば演技種目のいろいろある中に、最も重要なものは、うまれ・きよまりといふ行事です。王朝以前の祝詞のりとに出てくるゆまはり・きよまはりといふ語と、あまり似ていて、しかもそれが田舎風になつてゐる点が、古風でもあるし、またそのまま安心してうけとれないといふ気が、まず起ころのです。それで、この花祭りをする目的は、主として、うまれ・きよまりにあるといふのです。花祭りを修する事によつて、一時死んだような状態にあつたものが、生まれ変わり浄まつて、すつかり違つた新しい生命を持つて出て来るのだと、そう信じているようです。ために、前年以來あ

るいはもつと正確には、この前御神楽または花祭りを行った時以後、大病に罹^かつた者は、一時にうまれ・きよまりを受けるのだというふう^にに考えていました。だから、字や村にもちろん経済的な負担はかかっているのですが、大きな入り用は、そのうまれ・きよまりにあずかろうとする人達が納める神楽料と言うべきもので、まかなっていたようです。七日あるいは三日の御神楽の時代には、その年祭りをする家がきまると、その屋敷の中に一区画^{へた}距^たつた所に、白山^{シラヤマ}というものが立ちます。その中に、それ等の人が皆入りこんでいる。そして山は、榊^{さかき}や幣^{ぬさ}のよなもので飾^かつてある。花祭りを行う^{ムナヤ}花家と白山とをつなぐ道がありまして、それでつながっているものと見ていたようです。花祭りが段々すすんでくると、いろんな鬼の姿をしたものが出て来ます。その鬼が白山を切りさいて、中にいる人々を解放する形をするのだと思われるようなことを、大きな鉞^{まさかり}を持って、力足^{ちからあし}——反閤^{ヘンパイ}と言います——を踏む儀式を行います。何しろ鬼が出て来^きてするのだから、白山にこもっている人達は、地獄におちている亡者を示しているのだというような考えを、昔の村人たちは持っていたようです。が実は大きに反対で、おそらく山の中にあると思われて来た他界から出現した巨人が、その力をもつて、齋戒沐浴^{さいかいもくよく}、非常な謹慎をしている人達を、とき放して一挙に新しく生まれ変わらすのだと、そういう考えは、一貫して持っていたようです。それがまた正しくもあり、我が国における、他界にいる異人が、我々のために時あつてこの世界へ現れてくれるものとしていた古い精神が、ここにも形は変わって

も、はつきり伝っているものと言えます。もつとよくわかることは、先に言いましたように、ゆまはり・きよまはりを誂なまつたのに違いがない。絶対の謹慎・禁忌の生活を行為するという意味の語が、意味の大部分を忘れながら、そのまま使われていて、それがまた、新しくこれと一続きに考え保たれていたうまれきよまるための謹慎というような精神を、またはつきりさせて来たわけです。神楽と言えば、平安朝中期以来栄えた宮廷の御神楽と、それよりは遥かに起源の古い天窟戸あめのいわやどにおける鈿女命うずめのみことの神遊かみあそび、これを単純に連絡させて、それを本体のように考えていますが、そうした古代の神遊の他に、幾種類かの古い神遊があつて、平安朝になつても、その古いのやまた新しく加わつたいろいろの神遊、その一部分に宮廷の御神楽があつたのを、逆に神楽と言うのが全体を表す語のように考えるようになったのです。もちろん後世では、伊勢神楽そのほかの神遊を、皆神楽となえていたのだから、それはそれでもよろしいが、歴史的に言えば、皆別々の起源、別々の名称を持つていたものでしょう。宮廷の御神楽には、うまれ・きよまりといった考え方は、神楽自体としては、どうも含まれていないようなのですが、今日地方に行われている広い意味の神楽は、多くこの精神を持つているようです。だから、我々の友人や先輩が組織した学説は、立派は立派でも、材料が粗雑であつたり、豊富な材料を使つていても、一方に偏していたり、また材料の沢山ある所を中心として考えたり、勢力あるあたりの材料に専ら傾もつぱいたり、常民じょうみんの風習・民間のしきたりなどを軽く見すぎる傾向がありました。そ